

「矢代幸雄と大和文華館」展によせて（その1）

矢代幸雄の美術へのまなざしをたどる旅

矢代幸雄（1890-1975年5月25日）は大和文華館の成り立ちとコレクション、そして歴史をたどる上で欠かせない人物です。一人の美術史家として矢代幸雄はポッティチェリ研究に大きな足跡を残した研究者として国際的に知られ、また、日本近代における美術研究と文化事業に重要な役割を果たしました。

大和文華館は昭和35年（1960）に開館していますが、財団法人としての設立は昭和21年（1946）に遡ります。その設立背景には第二次世界大戦が終戦を迎えたことが深く関係しています。

近鉄社長であった種田虎雄は日本古代の文化に恵まれた近鉄沿線の地に日本美術と文化を世界に発信する場を創設しようと考え、文化的事業を相談されたのが、美術研究において世界的な広い視野を持ち、近代日本における文化事業と深い関わりを持っていた矢代幸雄であり、ここに美術館設立が構想されました。

1946年は国際連合教育科学文化機関（UNESCO）が設立された年であり、教育や科学、文化によって戦争を起こさない平和な世界を目指すことが宣言され（「世界の諸人民の教育、科学及び文化上の関係を通じて」「国際平和と人類の共通の福祉」という目的を促進する）『ユネスコ憲章』（前文）より、国際的な非政府組織として国際博物館会議（ICOM）が創設されています。

矢代が大和文華館開館に向けて関西に通いながら作品の蒐集を行っていた昭和24年（1949）には法隆寺金堂壁画が焼損し、文化財保護と保存の関心が高まった時期

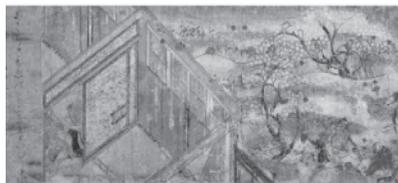


図1 国宝 寢覚物語絵巻（部分）
大和文華館

でもあります。

矢代幸雄は生涯に数多くの文章や著作を残しています。その中では美術に対する自らの考えが次のように述べられています。

・「美術は実は人間の心で感じ味わうもの」（矢代幸雄『私の美術遍歴』岩波書店1972年9月）

・「人生を広い意味において楽しい嬉しいものにし、世の中を美しく、また社会や世界を幸福なる平和の喜びに浸す、そういうものが、世に美術のというものの存在の理由ではなかろうか。美術は美術史以前のただ心を養う宝ではなかろうか。私は美術をその本源である人生の上の役立ちに帰したい。私は大和文華館をそういう本源の意味に取って美術を味わい得る美の殿堂にしたい」（『芸術新潮』1960年12月）

矢代は美術の存在理由を「社会や世界を幸福なる平和の喜びに浸す」と述べていますが、このような考えは当時の国際社会においても切実なものとなっていました。近代における東洋美術の鑑賞と研究の歴史の中で、広い視野にたつて東西の美術を捉えた矢代幸雄による東洋美術研究の道筋と美術へのまなざしについて、本展覧会では次のような構成でたどりたと思います。

【第一章：東洋美術との出会い

——三溪のコレクションと交流関係】

横浜生まれの矢代幸雄は英語に親しみ、西洋美術研究を進める中で原三溪（1868

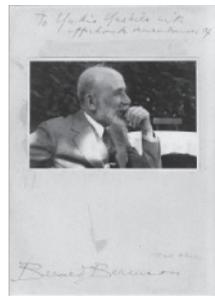


図2 ベレンソンから矢代へのカード
個人蔵

-1939)と出会い、三溪の持つ珠玉の東洋美術コレクションと交流関係を通じて、東洋美術への造詣を深めています。本章では、矢代の美術鑑賞に対する姿勢に大きな影響を与えた原三溪旧蔵品を中心に、矢代と関わりが深い作品を展示します。

（図1 国宝 寢覚物語絵巻 日本・平安時代後期 大和文華館）

【第二章：欧州留学とポッティチェリ研究
——東洋美術への視点とともに】

矢代幸雄はイギリス、次いでイタリアで西洋美術を学び、生涯を通じた恩師となるバーナード・ベレンソンに師事してポッティチェリ研究を深めます（図2 ベレンソンの写真入りベレンソンから矢代へ贈られたカード 個人蔵）。矢代幸雄の研究における新基軸には、細部表現への図版を多用した考察と東洋美術との表現上の比較が挙げられます。（国宝 婦女遊楽図屏風（松浦屏風） 日本・江戸時代 大和文華館 ※展覧案内を参照）

【第三章：国際的視野から見た日本・東洋美術
——ロンドン・中国芸術国際展覧会と東洋美術研究】

1935-1936年にイギリス・ロンドンで開催された中国芸術国際展覧会は、北京から南遷していた故宮博物院の文物などが展示され、欧米に中国美術への大きな反響をもたらします。この展覧会には日本からも中国美術作品が出展されています。矢代幸雄は日本での外国委員（foreign general committee）となり、ロンドンで中国美術についての講演を行っています。この出来事は、矢代にとってとくに中国美術への深い関心



図3 重要文化財 饗養文方盃
根津美術館

を持つきっかけになりました。

本章ではロンドンでの中国芸術国際展覧会に日本から出陳された主要な作品を展示いたします。欧州で中国美術に対する関心が高まる契機となった展覧会によって、当時の中国美術に対する意識と評価を探るとともに、矢代幸雄が中国および東洋美術へと研究の視野を広げた過程をたどります。

（図3 重要文化財 饗養文方盃 中国・殷時代 根津美術館）

【第四章：矢代幸雄と大和文華館

——東洋美術へのまなざしとコレクション】

欧州留学から帰国した矢代幸雄は、政府の委託を受けて欧米で日本美術展を開催する仕事を行う傍ら、中国へも足を運び、自ら心がけて文化や美術に接しています。その後、近畿日本鉄道社長（近鉄）社長であった種田虎雄との知遇により、大和文華館（公益財団法人 大和文華館）設立に携わり、コレクションの蒐集をまかされ、初代館長を務めました。「美の殿堂」として、矢代幸雄が理想とする美術館設立のために蒐集された東洋美術作品は、これまで矢代が培ってきた東洋美術への造詣が反映されています。美術を通じた国内外の美術史家や画家、文学者、政治家など幅広い交友関係にも注目します。（図4 重要美術品 三彩立女俑 中国・唐時代 永青文庫）

本展覧会は、矢代幸雄の没後50年の命日にあたる5月25日までを会期とします。開館65年となる大和文華館で、矢代幸雄が大切に「芸術を愛する喜び」を感じていただけましたら幸いです。（瀧朝子）



図4 重要美術品 三彩立女俑
永青文庫